



YCS【ゆりコミュニティ・スクール】通信

第1号 令和2年10月9日発行

本校が学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を設置して3年になりました。昨年からの活動が軌道に乗り、年度末を迎えようとしたところ、新型コロナウイルス感染拡大・全国非常事態宣言の発令により、活動の見直しを図らなければならない状況になりました。

コミュニティ・スクールでは、学校と地域住民、保護者等が力を合わせて学校の運営に取り組み、共に子どもたちを育み、共生社会の実現を目的としています。昨年度、本校では「ゆり支援学校の子どものどのような子どもに育てたいか」をテーマに熟議を行いました。地域の方たちと熟議などを通して活発な意見交換をし、相互理解を深めてきました。今年度はそこで話し合ったことを実現するために、一層の連携を図っていく予定でしたが、年度にこだわらず、息の長い活動をしていくことを確認しました。

今年度、新しいメンバーを7名お迎えし、第2回学校運営協議会が本校を会場に実施されました。委員の皆様には、本校児童生徒の学習の様子を直接ご覧頂き、その後の会議では今年度の学校運営方針の確認、それについてのご提案や助言等をいただいております。今号では、その様子を簡潔にお知らせいたします。

構成メンバーの紹介

◎学校運営協議会委員（○印は新任）

- 遠藤千代子 氏（由利本荘市健康福祉部子育て支援課長）
- 尾留川 等 氏（つるまい福祉会 水林新生園施設長）
- 丹 悟 氏（本荘公共職業安定所 所長）
- 佐々木 薫 氏（由利本荘地域生活支援センター 所長）
- 佐々木紀子 氏（由利本荘市教育委員会学校教育課 指導主事）
- 大場ひろみ 氏（文化交流館カダーレ 館長）
- 安倍 武義 氏（元本荘北中学校長）
- 増田 良 氏（にかほ市教育委員会教育研究所 指導主事）
- 鈴木 賢幸 氏（由利本荘青年会議所 理事長）
- 菅原 真理 氏（由利本荘市子ども読書活動推進会議 研修部長）
- 鷹島 直子 氏（障がい者支援事業所「逢い」サービス管理責任者）
- 古池 正子 氏（ゆり支援学校前PTA会長 学校後援会副会長）
- 佐藤 徹 氏（ゆり支援学校PTA会長）

○本校職員

校長	高橋 譲	小学部副主事	高橋 直子
教頭	佐々木義範	中学部副主事	太田 清子
教頭	近藤 郁	高等部副主事	大庭せい子
小学部主事	山中 征子	CS推進委員会担当	熊地 需
中学部主事	菊地 正紀	進路指導主事	三浦 智己
高等部主事	鈴木 健	主任寄宿舎指導員	仁平 牧子



はじめに全校の授業参観



学校経営説明を確認



意見や感想を交換

◇会長、副会長の選出

- ・事務局一任により **会長** 安倍 武義 氏 **副会長** 尾留川 等 氏

話し合いの内容

◇学校運営説明の確認（高橋譲 校長）

- ・一頃は障害のない子どもが障害のある子どもに思いやりをもつことがメインの交流であったが、支援学校の子どもたちも自分たちでできることを通常の子どもたちに教えるといった、お互いが思いやりをもてる交流になってきている。
- ・重点事項では、引き続き毎日の授業づくりを充実させていく。子どもが取り組んだ学習を自分できちんと振り返り頑張ったことや分かったことを実感できるような授業にしていきたい。
- ・交流に先立って、本校職員が交流相手校に出向いて障害理解の授業も行っている。
- ・生涯学習センターや「逢い」で引き受けていただいている障害者の生涯学習など、卒業後も生涯学習につながっていくような取り組みを作っていけないかと考えている。
- ・「職業教育フェア」は今年度本校が主幹校である。例年ハローワークも一緒に障害者雇用率未達成の企業へのセミナーを開催したり、作業学習製品販売会を行ったり、また学習の成果の発表として錬成会（ビルクリ、喫茶部門の競技大会）を行っている。今年度はセミナーや作業学習製品販売会はないが、案内できるように今後検討していきたい。
- ・道川分教室は、現在在籍者、小学部5年1名、高等部1年3名、高等部3年2名である。今年を含め、3年で分教室を閉じる。小学部5年生は訪問教育で引き続き指導していく。縮小するが、最後まできちんと指導していく。

◇寄せられたご意見（抜粋）

- ・地域の人たちに障害のある子どもをどう知ってもらうかが今後の課題である。親の心配事は、高等部卒業後どうなるか。友達はできるか、余暇は過ごせるか、親として何ができるか、地域の中で何が必要かを考えている。卒業後に関するいろいろな情報をもっと発信してほしい。ネットワークがもっとできていけばいい。少しずつ問題がクリアになっていけばいいと思う。（PTA会長、佐藤委員）
- ・特別支援学校のコミュニティ・スクールの在り方はどうあればよいか。社会につなぐ役割が必要であり、社会に出て過ごす場が必要である。受け入れる社会を作るためにはどうしたらよいか。いろいろな事業に取り組むことで実を結んできているが、地域と学校をつなぐものがあればいい。（安倍委員）
- ・自分の子ども（卒業生）は、日中一時支援事業を利用している。行くことを楽しみにしている。卒業後は、事業所の利用者も知らないことがたくさんある。子どもが一般就労した親はなおさら情報はないだろう。事業所同士の情報もあまりない。子どもが自分でやりたいことを選択できる状況であればよい。在学中は情報がたくさんあるが、卒業後は全くなくなる。（古池委員）
- ・学校にいる間にいろいろな人とのつながりをもっておきたい。知らないところに飛び込むのは難しいだろう。今回のコロナ禍で感じたことは、人と会って話をするのが大事ということ。人とのつながりができるように取り組んでいきたい。（菅原委員）
- ・昨年までの交流が実を結んでいる。コロナ禍でもできることは継続してやっていく。形を変え3密を避けながら取り組んでいく。コミュニケーションを持つ場として何が大切か、卒業生・保護者は何を欲しているかを知ることが重要ではないか。（増田委員）
- ・熟議から出てきた意見を自分がどう返していけばいいのか。小学部から高等部までの長いスパンでの目標設定を経て社会へ出る。学校行事などでカダーレを使用していただくことで、地域の方にやり支援学校が見えるようにしたい。（大場委員）
- ・私たち青年会議所は主にイベントを行っている。活動をどう発信していくか、イベントをどんな形でやっていくか、今までと手法を変えていかなければならない。卒業後の情報が少ないというのであれば、インターネットの活用はどうか。HPに卒業生向けのバナーを作って活動の発信をしてはどうか。（鈴木委員）